
ワークディスカッション入門

精神分析の新たな挑戦

山村 真著

金剛出版, A5判 228頁, 4,400円, 2025年11月刊

(京都文教大学) 大橋良枝

評者が初めてワークディスカッション（以下、WD）に触れたのは、コロナ禍以前に開催された子どもの心理療法支援会（通称サポチル）における鈴木誠氏と上田順一氏のセミナーであった。その後、WDにたずさわる臨床家との対話や日本ワークディスカッション研究会発足の報に接するなかで、国内におけるWDへの関心の高まりを実感してきた。そのような折に刊行された本書であるが、評者にとって単なる入門書にとどまらない意義をもつものであった。

本書は、第Ⅰ部〈理論編〉、第Ⅱ部〈実践編〉、第Ⅲ部〈番外編〉および付章から構成される。理論編ではタビストックの理論を基盤に、WDと関連の深いグループ理論・組織理論が整理され、社会的防衛、組織文化、内省的実践といった概念が精神分析的組織論の文脈に位置づけられる。実践編では総合病院における新人看護師を対象としたWD事例が、社会的防衛、グループ機能、組織との相互作用の視点から描かれるが、そこには著者自身のWDの実装をめぐる試行錯誤、すなわちアクションリサーチの過程が読み取れる。番外編ではビオンの原子価概念を用いてWDに参加しにくいメンバーを論じるとともに、がん患者への支援過程が提示される。評者はこの章を通じて、本書が「死の予感」や「自らの無力さ」に直面する圧倒的な現場から生まれた実践の記録であることを再認識した。

評者は、メンタライゼーション理論および精神分析理論を基盤に個人・集団・組織を対象とした臨床実践と研究に携わってきた立場から、本書の意義を二点に見いだす。第一に、著者が一貫してグループ

ワーカーの視座からWDを描いている点である。社会的防衛を省く成員の心理的現実との相互作用として捉える姿勢や、言語化しがたいグループの雰囲気や重視する態度には深い共感を覚える。さらに、WDを持続可能な場とするために管理者や組織との交渉が不可欠であることを強調する点も、現場に根ざした実践感覚を示している。

第二に、本書は、「死の予感、あるいは死そのもの」や「自分たちは無力であるという事実」に直面する現場においてWDが専門家を支え、その先におられる患者やクライアントに寄与し得ることを示す点にある。本書に示された臨床現場である緩和ケアや終末期医療の場では社会的防衛が強まり、支援者が疲弊し孤立する危険があろう。そのなかで、一人ひとりの心が失われない場をつくろうとする試行錯誤は、理論的整理を超えた重みをもつ。ここでいうアクションリサーチとは、理論の適用ではなく、現場での思索と実践を往還する過程そのものである。

本書を通じて改めてWDは、メンタライゼーション理論や集団精神療法理論も重視している価値観である、集団——私たちが生きるあらゆる場——を、安心で、そこにいる他者は信頼に価すると基本的に思える場にしていくこと (Fonagy et al, 2019)、ひいてはtotal culture of inquiry (Main, 1983)、つまり「全体で何故このようなことが起こるのか考えようという集団文化」を醸成するのに大変有効な手法であると理解したのである。

文 献

- Fonagy P, Luyten P, Allison E et al (2019) Mentalizing, epistemic trust and the phenomenology of psychotherapy. *Psychopathology* 52(2) ; 94-103.
- Main T (1983) The concept of the therapeutic community : Variations and vicissitudess. In : M Pain (Ed) *The Evolution of Group Analysis*. Jessica Kingsley Publishers.